

無靈魂論としての仏教

仏教は無靈魂論である（諸法無我）

"The Buddhist schools differed among themselves to a great degree; they have, however, one thing in common -- the denial of substance (atman)."

「各仏教学派はその教義においてそれぞれ大いなる相違を示しているが、それでも一つの共通点をもっている。それは実体（アートマン）の否定である。」

(T.R.V. Murti, *The Central Philosophy of Buddhism* , p26)

諸法無我と諸法非我

三法印の一「諸法無我」は厳密には「諸法非我」と訳されるべき。

諸法（＝一切の存在）とはなにか？

「それは、眼と眼に見えるもの、耳と耳に聞こえるもの、鼻と鼻ににおうもの、舌と舌に味わわれるもの、身体と身体に接触されるもの、心と心の作用、のことです。これが『一切』と呼ばれるものである。」 (SN. 33.1.3)

一切の作られたものは無常 sabbe saṃkhārā aniccā (Dhp.277)

一切の作られたものは苦 sabbe saṃkhārā dukkhā (Dhp.278)

一切の存在は無我 sabbe dhammā anattā (Dhp.279)

「比丘たちよ、眼は無常である。すべて無常なるものは苦である。すべて苦なるものは無我である。すべて無我なるものは『これ我がものにあらず。これ我にあらず。これわが我（アートマン）にあらず。』と、このように正しき智慧をもって、あるがままにこれを見なければならぬ。比丘たちよ、耳について言うも同じである。鼻について言うも同じである。舌について言うも同じである。身について言うも同じであり、また、意について言うも同じである。」 (SN. 35:1)

*ここでいう苦(dukkhā)とは、苦痛とか苦悩という意味ではなく、「思い通りにならない」ことである。無常で自分の思い通りにならないようなものを「アートマン」と呼ぶことはできない、という趣旨である。

すなわち、釈尊がアートマンを否定する論法は、「一切とは何か」を規定し、「そのいずれもがアートマンではあり得ない」というもので、「アートマンは存在しない」と主張したのではない。この違いが重要であるのは、当時のインド哲学・宗教一般ではアートマンの存在は自明なこととされていたので、それに対して単純に「存在せず」と主張することは、形而上学論争になってしまうからだと思われる。釈尊が無用な形而上学論争を禁止し、それに対する回答を拒止した（無記）ことは、「毒矢の譬喩」からも知られる。釈尊の否定は、あくまでも形而下（経験できる範囲）の世界におけるものであって、それを超える事柄は全く問題にしなかった。

我＝靈魂なのか？

漢訳仏典で「我」と訳されるのは、サンスクリットではアートマン"ātman"（パーリ語ではattan）。

「インド哲学一般、ことに、ウパニシャッドや、ヴェーダーンタ哲学で、《個人我》を意味する述語。《呼吸する》という動詞から作られた言葉で、呼吸というはたらきが生命の根源であると考え、そこから進んで個人を統一する中心の名としたのである。」（新・佛教辞典）

すなわち、アートマンとは個人に内在する精神的実体であり、ウパニシャッドによれば、肉体の死後も存続し、輪廻の主体となり、宇宙原理たるブラフマン（梵）に合一したときに輪廻からの解放が実現される（梵我一如）。

以上の意味から考えると、現代の日本人がふつうにいう「靈魂」にかなり近いことが分かる。むしろ、漢訳の「我」「無我」から、これを哲学的な意味のエゴ（思考主体）とみたり、我執に関係づけるのは誤りといえる（我執というときの我はサンスクリットでaham）。「仏法には無我にて候」（蓮如、聖典883頁）において、厳密に無我の意味をおさえるならば、「自己のはからいをすてる」「己をむなしゅうする」ことは無我とは関係ない。

しかし、靈魂はもともと存在しない、と言い切れる時、そのようなものへの執着から離れられることもたしかだろう。

仏教は靈肉二元論ではなく、五蘊仮和合説である

五蘊＝色（身体）・受（感覚）・行（意志）・想（想像）・識（認識）

これらが仮にある条件のもとで和合してつくられているのがこの私というもので、これらを統合するような第六のものがあるわけではなく、ましてや神のような存在によって作られたのでもない。

「肉体が減んでも霊が残る」というのは、キリスト教をはじめとする諸宗教（バラモン教もそうだが）がいうところであって、仏教ではそもそも肉体（身）と精神（心）は相互作用の関係にあって、不二であると教える。身のない心、肉体のない精神は妄想である。

無我だけを強調するのは、断見になるのではないか？

常見：死んでも「私」（我、アートマン）は残る、と考えること

断見：死んだら何も残らない、と考えること

このどちらも辺執見（極端な考え方）であり、それを離れることを仏教は教えている。常見・断見は一般的に有る無しを問題にしているのではなく、死後にこの私がどうなるか、を問題にしているのであって、どちらにも共通しているのは、＜生きている間はこの「私」が確かに存在する＞ということだが、そのことじたいが否定されているのだから、「アートマンはもともと存在しない」と主張することは、断見とはちがう。断見とは「生きている時はアートマンが存在するが、死ねば消滅する」ということである。

また、有無中道に関しても、龍樹の説く中道とは単に中間ということではなく（そもそも「有る」「無い」の中間の状態ということはありません）、一切の実体と認めない（空）なのであるが、だからといって虚無主義になるのではなく世間的な約束事・概念として（仮）設定される、ということだから（空仮中三諦）、無我説を

強調することは中道と矛盾しない。

仏教は輪廻転生を認めない

アートマンを認めない以上、輪廻転生の主体が存在しないので、少なくとも実体的な輪廻転生はありえないはず。しかし実際には、様々な学派によって、アートマンなしの輪廻転生を可能にする理論が構築されていった。たとえば：

説一切有部の場合：五位七十五法なる実体的構成要素の組み替えによって輪廻を認める

唯識派の場合：アーラヤ識によって輪廻を認める

そのほか：プドガラやプルシャなど、アートマンに類似した存在を構想

「この世からあの世へと繰り返し繰り返し、生まれ死ぬ輪廻を受ける人々は、無明こそによって行くのである。この無明とは大いなる愚痴であり、それによってこそ長い輪廻があるのである。しかし明知に達した生けるものたちは、再び迷いの生存に赴かない。」（スッタ・ニパータ729,730）

死後の世界は執着の産物

インドでは輪廻転生が常識だから、「あの世」を語らないし、墓も造らない。日本では事情が違い、靈魂の行き先を想定することが常識だった。これは仏教的見地から言えば、死んでもなお自我にしがみつきたい執着の産物といえる。「あの世」が存在するかどうかはだれにも証明することはできず、仏教徒にとってはあってもなくてもどうでもよい。

人間（すべての存在）は縁起＝関係存在

本来空（縁起的存在）である自己が空の世界に還っていく。元々存在しないのだから、死後に何かが残ることもない。海と泡の譬え、あるいはエネルギーと素粒子の譬え。

「身体について、我が物という思いの全く存在しない人、また何ものかがないからといって悲しむことのない人、彼は実に世の中であって老いることはない。」（スッタ・ニパータ）

「この身体は、すでに生あればかならず滅にうつされゆくことありとも、この心性はあへて滅する事なし。よく生滅にうつされぬ心性わが身にあることをしりぬれば、これを本来の性とするがゆゑに、身はこれかりのすがたなり、死此生彼さだまりなし。心はこれ常住なり、去来現在かはるべからず。かくのごとくするを、生死をはなれたりとはいふなり…いまいふところの見、またく仏法にあらず。先尼外道が見なり。」（先尼＝セーナニ、バラモン教の一派）（道元）

「ひきよせて結べば草の庵にてとくればもとの野原なりけり」（一休）

「浄土は命のふるさと」（金子大栄）

浄土は死後の世界ともいえるが、その浄土自体が宇宙のどこかに実在するのではない。あくまでも涅槃寂靜＝空の世界＝自然の浄土。であると共に、唯心の浄土ではなく、仮説としての西方浄土。（善導の指方立相説を参照）